

令和元年6月10日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02081

研究課題名(和文) 古代末期における富と貧困に関わる「徳」理論の成立と変容

研究課題名(英文) The Emergence and Development of Virtue Theory concerning Wealth and Poverty in Late Antiquity

研究代表者

出村 和彦 (DEMURA, KAZUHIKO)

岡山大学・ヘルスシステム統合科学研究科・教授

研究者番号：30237028

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：(1)本研究は、最新のヘレニズム哲学倫理学研究と、古代末期史学の成果を踏まえ、両領域を架橋すべく、セネカやアウグスティヌスらの原典の精読に基づいた成果として、彼らのレトリカルな言説の根底に確立した富と貧困に関わる「徳」の理論的成立と古代末期における変容を精査した。(2)これを通じて、現代の徳倫理学virtue ethicsでは見失われがちな富と貧困という人間が直面する現実の問題へのアクチュアルな関与を見据えた思想的視野を開くものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、(1)原典の精読に基づき、最新のヘレニズム哲学倫理学研究と、古代末期史学の成果を踏まえ、両領域を架橋し思想的な視野のもとに統合的に考察する点で新しい学術的意義を有する。(2)特に、彼らのレトリカルな言説の根底に確立した富と貧困に関わる「徳」の理論的成立と古代末期における変容を精査することで、現代の徳倫理学virtue ethicsでは見失われがちな富と貧困という人間が直面する現実の問題へのアクチュアルな関与を見据えるという現代的意義を有する。(3)さらに、東方と西方の偏差を見据えることによって、古代末期思想史を捉え直すことでその研究成果の国際的な寄与を果たした。

研究成果の概要(英文)：(1) This study, based on the latest research on the ethics of Hellenism philosophy and the late antique history, surveys the theoretical formation and development of "virtue" related to wealth and poverty in late antiquity, which was established in the foundation of their rhetorical discourse, as a result of detailed reading of the original Latin text of Seneca, Augustine, and others. (2) As a result, it will integrate these two disciplines into the research in the history of ideas and open up the perspective towards the commitments confronting the actual settings beyond the limitation of today's virtue ethics.

研究分野：哲学・倫理学・思想史

キーワード：徳 貧困 古代末期 アウグスティヌス

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 古代末期の後期ストア倫理学での感情と動機付けの考察は、近年充実した研究が始まり (S.C.Byers, Perception, Sensibility, and Moral Motivation in Augustine: A Stoic-Platonic Synthesis (2014) や R.Sorabji, Emotion and Peace of Mind: From Stoic Agitation to Christian Temptation (2000) など)、初期キリスト教との関連にも新たに光が当てられている。しかし、貧困や富といった現実に直面する形で問題が捉えられておらず、これらとの具体的な関わりで成立する「徳」についての理論的考察に至っていない。他方、「徳」概念を中心に据える現代の徳倫理学 virtue ethics では、アリストテレスとカントの問題群に定位して議論が構築され、慈善チャリティーの捉え方も不十分に終わっている。たとえば、代表的なハーストハウス『徳倫理学について』(1999、邦訳 2014) も、同情、憐れみ、愛は簡単にふれられるのみ(139頁-243頁、特に150-1頁、224-5頁)である。また、古代末期の貧困状況や都市有力市民やキリスト教会司教たちの貧者たちへの慈善的関わりや救貧施設の設置についての個別的歴史研究(たとえば、P.ヴェーヌ『パンと競技場』(1976)、E.Patagean(1977))を踏まえて、これに関わる当事者の意図や心性についての研究は、ピーター・ブラウン(『貧者を愛する者：古代末期におけるキリスト教的慈善の誕生』(Peter Brown, Poverty and Leadership in the Late Roman Empire, 2002))の影響力が大きいものの、東方と西方の違いをきめ細かく捉えるには至らず、とりわけ西方での貧困や富に関わる「徳」理論の成立と変容については手つかずのままであった。

(2) 本研究は、以上の、古代末期の思想史研究の不備を補うべく構想された。その際、出村を代表として遂行した科研費基盤研究C(一般)(平成21~23年度)「転換期における「貧困」に関するアウグスティヌスの洞察と実践の研究」が明らかにしたようにアウグスティヌス(354-430)の富と貧困に関する著作や説教は、古代末期アフリカの富と貧困の現状に対しては、その変更主眼せずには靈的な変革を求めるレトリカルな色彩の強い言説であることに特に留意した。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究は、古代末期における後期ストア哲学から初期キリスト教における富と貧困に関わる「徳」の成立と変容という理論的切り口から、現実の受取り手の構えを踏まえることで、そのようなレトリカルな言説の背後の現実に直面して試される「徳」のあり方の解明を目指すものである。その際に、最新のヘレニズム哲学倫理学研究と古代末期歴史学の成果を踏まえ、両学問領域を架橋すべく、セネカやアウグスティヌスらの原典の精読に基づき、彼らのレトリカルな言説の根底に確立した富と貧困に関わる「徳」の理論的成立と古代末期における変容を精査することで、現代の徳倫理学 virtue ethics では見失われがちな富と貧困という人間が直面する現実の問題へのアクチュアルな関与を見据えた思想史的視野を開くことを目的とする。とりわけ、東方と西方の偏差を見据えることによって、古代末期思想史を捉え直すことでその研究成果の国際的な寄与を目指すものである。

## 3. 研究の方法

(1) 原典テキストの読解という古典学的方法を進めながら、国内外の学会、研究集会等で古代末期思想や徳倫理学に関する最新の情報を収集するとともに、アウグスティヌスらが活動した古代末期のローマ遺跡を探訪し、彼らが当時の社会の富と貧困の現実にどのような空間で関わ

ったかを実践してテキストのレトリックと歴史的リアリティを思想史学に考察する方法を併用する。

#### 4. 研究成果

(1) オックスフォード大学での第 17 回国際教父学研究集会にて Augustine and Seneca on Virtue and Moral Motivation concerning Poverty and Senescence を発表し、セネカとアウグスティヌスの比較をして、富と貧困をめぐる両者の人間観・徳論を比較した。G.D.Dunn & W. Mayer (eds.), *Christians Shaping Identity from the Roman Empire to Byzantium: Studies Inspired by Pauline Allen* の 13 章として、*Shaping the Poor: The Philosophical Anthropology of Augustine in the context of the Era of Crisis* (Brill, Leiden/New York) を刊行し、アウグスティヌスの貧困への取り組みをより広いコンテキストで考察しその人間学的基礎を示した。教父研究会例会にて上記の成果を発展させて、ミラノ・カッシキアム(イタリア)、ヴェルツブルク・トリーア(ドイツ)での資料収集を反映させた発表「アウグスティヌスにおける「貧困」「病」そして「老齢」」を行った(27 年度)。

(2) 2016 年 7 月 29 日にオーストラリアカトリック大学初期キリスト教研究センターにおけるセミナーでの提題者として、'Diagnosis and Care of the Self: Poverty and Diseases in Augustine's Confessions' と題する本研究課題の研究の一端を発表し、突っ込んだ議論を行った。その結果、富と貧困の徳理論が、病や老齢の理解にも密接に関連するという知見をテキストから確認し、そのレトリカルな根拠の同型性をという特徴を抽出した。ここから国際的研究グループ『レメディール』ReMeDHe-L (=Religion, Medicine, Disability, Healthcare in Late Antiquity)への参加を招請されるに至った。サンクトペテルブルク(ロシア)での第 10 回アジア環太平洋初期キリスト教学会国際研究集会に参加し(2016 年 9 月 9 日)、『The Survival of *Philosophia*: in the Case of Augustine' と題する発表で、本課題の根本にある哲学 *philosophia* に関わるフマニタース概念を取り上げ、ギリシア語圏東方修道制理解との対比でラテン語圏西方での展開の独自性について、キケロとアウグスティヌスのテキストに基づいて指摘した(28 年度)。

(3) イタリア(ミラノ・フィレンツェ・サンジミニャーノ・トラバーニ・ナポリ等)でのアウグスティヌスの貧困に関する活動を反映した遺跡の実地調査を行った。これらをもとにアウグスティヌスの生涯とその人間像に関する評伝『アウグスティヌス「心」の哲学者』(岩波新書)を執筆した。これによって、アウグスティヌスの生涯にわたる富と貧困への関わりにおいて、「心」を中心とする自己のあり方に立ちもどるところに、人間としての善きあり方としての「徳」が打ち立てられるという彼の哲学倫理学的特質を示した。それは、貧困、病、老齢といった苦境に直面する際も、富、健康、若さ(十全な活動力)といったいわば順境という場面においても、その人間の内面のあり方が問われて来るような「徳理論」であるという結論に至った。さらに、オックスフォードでのカッシキアム対話編『秩序』のワークショップにも参加して読解の内実を深め、ローマ古典とキリスト教を架橋するアウグスティヌスの初期思想の原点を精査した(29 年度)。

(4) 「初期キリスト教における健康・幸福・老い health, well-being and old age in Early Christianity」をメインテーマとする「Asia Pacific Early Christian Studies Society アジア環太平

洋初期キリスト教学会国際研究集会」APECSS2018(9月13-15日)を組織し、そこで Health Systems in Augustine Poverty and Illness as a human Condition'というテーマで研究発表し、古代末期における富と貧困の問題がアウグスティヌスにおいては、老いや病という人間の条件 human condition に深く関わるシステムの問題であることを明らかにした。この視点は、「アウグスティヌスにおける「貧困」「病」そして「老齢」」論文(パトリスティカ第20号所収)を補完するものであり、その準備の過程で、メルボルンでの古代末期におけるイベーションというシンポ(2018年8月16日17日)に出張参加して、ベルギーやオーストラリアの研究者と情報を交換し、最新の研究動向をフォローし今後の展望を開いた。貧困が老いをいかに生きるかの条件として深く関わる点については、既発表の Poverty and Senescence in Seneca and Augustine を補完する形で、2019年3月刊行の「老いの境界—西洋の知見から」という論文(『老い 人文学・ケアの現場・老年学』ポラーノ出版 所収)で、さらに視野を広げ、古典古代(プラトン、キケロから近代(夏目漱石『道草』やT・S・エリオット)なども考察した。以上を通じて、古代末期における富と貧困をめぐる人の善きあり方としての「徳」に関するアウグスティヌスの理論は老いや病という人間の条件に関する理論に通底することが明らかになった(30年度)。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2件)

- (1) 出村和彦、「教父研究と古代キリスト教文化」、『パトリスティカ 教父研究』第22号 3-18頁、2019年 [査読なし]
- (2) 出村和彦、「アウグスティヌスにおける「貧困」「病」そして「老齢」」、『パトリスティカ 教父研究』第20号 7-26頁、2017年 [査読付き]

〔学会発表〕(計 5件)

- (1) Kazuhiko Demura, Health Systems in Augustine: Poverty Illness and Old age as a Human Condition, Asia-Pacific Early Christian Studies Society, The 10th International Conference,(国際学会) at Okayama University, 2018年9月13日
- (2) Kazuhiko Demura, 'The Survival of Philosophia- in the Case of Augustine', Asia-Pacific Early Christian Studies Society, The 10th International Conference,(国際学会) at St. Petersburg State University of Aerospace Instrumentation, Russia, 2016年9月9日
- (3) Kazuhiko Demura, 'Diagnosis and Care of the Self :Poverty and Diseases in Augustine's Confessions ,' Early Christian Studies Seminar(招待講演) at Brisbane Australia, 2016年7月19日
- (4) 出村和彦、「アウグスティヌスにおける「貧困」、「病」そして「老齢」」、教父研究会第154回例会 於東京大学教養学部 2015年12月29日
- (5) Kazuhiko Demura, Augustine and Seneca on Virtue and Moral Motivation concerning Poverty and Senescence The 17th International Conference on Patristic Studies, at Oxford

〔図書〕(計3件)

(1) 出村和彦 他12名、「老いの境界 西洋古代の知見から」、本村昌文、加藤諭、近田真美子、日笠晴香、吉葉恭行(編)、『古い 人文学・ケアの現場・老年学』、ポラーノ出版、453頁(312-332頁)、2019年

(2) 出村和彦、『アウグスティヌス「心」の哲学者』、岩波書店、208頁、2017年

(3) Kazuhiko Demura, 他20名, Chapter 13 'Shaping the Poor: The Philosophical Anthropology of Augustine in the Context of the Era of Crisis', in W.Mayer, G.D.Dunn (eds.), *Christians Shaping Identity from the Roman Empire to Byzantium: Studies Inspired by Pauline Allen*, Brill, Leiden/New York, 520pp (248-265)、2015年

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名:

ローマ字氏名:

所属研究機関名:

部局名:

職名:

研究者番号(8桁):

(2)研究協力者

研究協力者氏名:

ローマ字氏名:

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。